

スガウェザリング技術振興財団 第26回表彰・第27回研究助成 贈呈式・記念祝賀会

(財)スガウェザリング技術振興財団では、毎年ウェザリングの研究について、著しい成果を上げられた方の表彰・研究助成を行っています。
本年度も各界の著名な方をお招きし、盛大に執り行われました。



◀ 写真(左) 林 幸秀 文部科学審議官
(中) 清水 司 理事長
(右) 春山志郎 審査委員長

平成 20 年 4 月 24 日 (木) 11 時 15 分～13 時
東海大学校友会館

開会にあたって、清水 司 理事長(東京家政大学理事長)より挨拶、春山志郎 審査委員長(東京工業大学名誉教授)の審査報告に続き、清水理事長より表彰並びに研究助成の贈呈が行われ、林 幸秀 文部科学審議官にご祝辞を戴きました。

引き続き記念祝賀会では、下邨昭三 理事(元科学技術事務次官・(財)核物質管理センター会長)の挨拶、飯塚幸三 理事(元工業技術院長・(社)日本計量振興協会会長)の発声で乾杯をしました。

受賞者研究のパネルによる展示・説明が行われ、また、受賞者ご夫妻のご出席もあって、和やかな中にも格調高い祝賀会となり、盛会でした。

第 1 回(昭和 57 年)より今回で、表彰は団体 14 件、個人 123 人、研究助成は 198 件を数えます。

記念祝賀会場



下邨昭三 理事



飯塚幸三 理事



受賞者研究の展示パネル

【第26回(平成19年度) 財団表彰】

科学技術賞



伊藤 勲

新日鐵化学㈱
取締役シニアエグゼクティブオフィサー

耐候性の基礎研究と合金鋼の開発

耐塩害性には特定の無機酸化皮膜が重要であるという従来になかった指針を得、新たな高純フェライト系ステンレス鋼を開発。皮膜表面に特有の陰電荷の大きさに着目、他の耐塩害性に必要な耐食鋼材の大きな指針となった。



佐藤 信幸

軽金属製品協会 理事
試験研究センター 取手試験所長

アルミニウムの陽極酸化塗装複合皮膜の屋外耐久性の研究及び標準化

アルミニウム建材の耐食性、耐候性などの屋外耐久性に関する調査研究。特にアルミニウム陽極酸化塗装複合皮膜の規格の標準化に関する試験報告書をまとめた。この結果は JIS H 8602 の改正、中国国家規格との整合化協議、ISO 規格提案に生かされ、複合皮膜の性能評価方法の発展に寄与した。

科学技術奨励賞



穂塚 裕之

㈲化学物質評価研究機構
高分子技術部技術第一課長

高分子材料の耐候性評価方法の研究

樹脂材料の促進暴露と屋外暴露の相関について研究、20年以上を経過している。また、ゴム材料については、TC 45 /SC 2 ゴム物理試験委員会のメンバーとして、JIS, ISO の制定・改正に取組み、耐候性試験用参照標準試験片の作製と評価に寄与した。



部 洋司

独立行政法人 産業技術総合研究所
計測標準研究部門 研究員

分光反射率標準および標準白色板のトレーサビリティ体系の確立

特に、耐候性試験の評価等必須となる測色技術(物体色測定)の基盤である分光反射率測定に関して多くの研究成果を挙げており、分光反射率標準を確立すると共に分光反射率にトレーサブルな標準白色板の校正体系を日本において確立するなど、関連業界に対する貢献は多大である。

特別技術功労賞



松木 明

㈲日本電子部品信頼性センター
環境試験所 所長代理

電子部品の環境試験方法の標準化および普及活動

電子部品に関連の金めっきを中心に、IEC 及び ISO に規定のガス腐食試験が欧州の気候をベースにした方法であるのに対し日本の気候条件を加味した方法の研究、確立に協力。また JIS Z 2371 のレベルアップ研究に参画、ISO 10062、ISO 9227 規格改正の原動力となった。

【第27回(平成20年度) 研究助成贈呈者】



織田 博則

大阪教育大学
教育学部 教授

染色布の日光堅ろう度向上剤開発に関する研究

近年、紫外線による皮膚障害を防御する意識が高まってきた。UV カット製品は光照射による染料の退色により、紫外線防護機能を著しく低下させる。耐光性に優れる UV カット衣料の開発を目的とする。



中谷 久之

北見工業大学 工学部
化学システム工学科 准教授

ポリプロピレン系複合材料の特異的劣化挙動の解明

ポリプロピレン系複合材料の耐候試験時に見られる特異的な劣化挙動現象を化学的および物理的な面から検討を行い、材料内部からクラックが生じる機構の解明、防止する手法を開発。



堀 勝

名古屋大学大学院工学研究科
電子情報システム専攻 教授

リモートプラズマ試験機内

ラジカル絶対密度測定に基づく試験機の高性能化

リモートプラズマ促進耐候試験機内の基底状態酸素ラジカル密度測定技術は既に確立し、その振る舞いの解明を進めている。ラジカル密度測定結果を基盤に試験機の高性能の知見を得る事を目的とする。

(肩書きは受賞当時・敬称略) 編集部